

農繁休みが二十五日まで、二十六日から学校が始まった。そのつぎの日の二十七日の日は五時間授業をして、あまり雨がひどいからといって、部落ごとにもとまって帰った。

桶谷へきて見ると、もう三十センチばかりで道へ水が乗りあげるところだった。河原は横巾が約百メートルくらいで、河原から道までの高さが四メートルか五メートルくらいあった。そんな広い河原いっぱいには、ものすごい水だった。やつと家へついた。私の家の前には沢がある。いつもはほんのちよつとの水なのに、二十七日の日はものすごい水の量だった。

私の家と沢とは六メートルくらいしかはなれていなかった。私は自分の家にいるのがおそろしかった。河原の水を見るとさつきよりも多くなっていて、道へ水が乗りあげていた。家の前の沢も水が多くなるいっぽうだ。

私と弟はカバンへ勉強道具を入れた。カバンはいつも自分のそばへおいといた。五時半頃夕ごはんをたべていたら、おとなりの Y のおじさんが、

「河原の水が道を乗りこえて、田んぼへ水がついて、田んぼは全滅だ。」

といってきた。夕ごはんをたべ終ってから沢を見たら、水の量が多くなってきた。お父さんが、

「 Y へ子供たちは避難したほうがよい。」

といったので、私と弟は安全なおとなりの Y へ避難することになった。

カバンをもって弟をつれて、お母さんにおくってもらって Y へ行った。お母さんが、

「よろしく願います。」とかいってたのんでいた。

その時沢でもものすごい音がした。びっくりしていたら、おとなりの H のおじさんが、

「沢がおし出してきた。おれは、みんなを呼んでくるで。」

といつて走って行った。お母さんは、私と弟に、

「あぶないから家の外へ出てはいけないよ。もしもこの家があぶなくなったら呼びにくるから、家の中にいるんだよ。」といつて走って行った。

少しすると近所の人たちが石油玉へ火をつけて、家の方へもっていった。私はおそろしさでふるえていたら、いろいろな家具がはこばれてきた。よくみると、私の家の家具は少ししかない。その少しの家具にいっぱいどろがついていた。おとなの人にきいてみると、もう家の中やまわりはものすごい水で、あぶなくて家の中へは行けないといつていた。お父さんやお母さんや H の人たちは、びしょびしょにぬれていた。近所の人たちは帰って行った。

私の家の一家と Y の一家は、みんな火ばたをとりまいてすわった。まるくなつてすわっても、だれ一人として口をひらくものはなかった。そうしている間にも雨は降り、沢はものすごい音をたてておしてくる。十時ごろ、子供と女の人は、部屋へふとんをしいてよこになった。男の人たちは、ローソクを一本たてて火ばたへすわっていて、沢でもものすごい音がすれば、石油玉へ火をつけ

て沢のようすを見に行ってきた。私たちも音がすればすぐとびおきて、みんな火ばたをとりかこんだ。お母さんたちは、私たち子供にも、

「死ぬとき全部いっしょに死ぬんだから安心してねているよ。おまえたちばかりは殺さんから。」といった。

だけど、どうしてもおそろしくてねむることができなかった。

二十八日午前一時五十分。今までよりも五倍も六倍もものすごい音がしたかと思うと、「メリーメリー」と木のおれる音にすぐ続いて、物が倒れる音がした。すぐＹのおじさんが石油玉を持って沢を見に行った。おじさんは、かえってきから、

「どうも」さんの家は行っちゃったらしい。」といった。

私は、まさかと思った。そのときのおどろきは、経験した人しかわからない。私の流された家は、私たち一家が約十年愛用してきた家なのだ。

また火ばたをとりかこんで全員すわった。それから、あと何時間で夜が明けるとかいつて、夜の明けるのをまった。こんな日にかぎって、夜が明けるのがほんとうにおそかった。

やつと明るくなってきた。雨はきのうよりよわくなったが、まだしとしとと降っていた。明るくなってきたが、被害は多くなっていた。道はとざされてしまつて、ほかの部落との連絡がつかなかった。

(三十六年)